

国際研究集会「比較研究・『抗倭図巻』と『倭寇図巻』」報告

二〇一〇年十一月二日、中国国家博物館（北京市）から陳履生館長助理・朱敏副研究館員らを招聘し、史料編纂所と附属画像史料解析センターの共催による国際研究集会「比較研究・『抗倭図巻』と『倭寇図巻』」を開催した。この研究集会は、中国国家博物館との覚書にしたがい、特別研究経費等の配分をうけた「抗倭図巻」プロジェクトを中心におこなわれた（プロジェクトの報告は『東京大学史料編纂所報』四六号（二〇一〇年度）を参照）。

以下、当日の三報告をここに掲載する。なお倭寇と倭寇図像をめぐる中国国家博物館との共同プロジェクトは、二〇一一年度から共同利用・共同研究拠点の特定共同研究として継続が図られている。

本集会の実施にあたっては、画像史料解析センター共同研究員の黄栄光氏（中国科学院自然科学史研究所）から多大なる御尽力をたまわったことを記して謝辞にかえたい。

（プロジェクト代表／保谷 徹）

『倭寇図巻』再考

須田 牧子

1、『倭寇図巻』とは

『倭寇図巻』とは、一六世紀半ばの倭寇と明軍との戦いを描いた絵巻である。絹布に五メートル以上にわたってカラーで描かれた、詳細で生き生きした図柄は、本所所蔵の数多の優品のなかでも、抜群の知名度を誇る。中学社会科・高校日本史の各社の教科書には、ほぼ百分図版として採用されて登場し、各地の博物館などに貸し出されて実物が展示される機会も多い。複製もこれまでに二種作られている。

中世東アジア海域の一大国際問題であった倭寇の活動のピークは大きく分けて二回ある。一回目は一四世紀後半、朝鮮半島・中国沿海部を襲撃したものである（前期倭寇）。二回目は一六世紀半ばから後半にかけて、

中国沿海部がその活動の主たる舞台となった（後期倭寇）。『倭寇図巻』は後期倭寇の時期に属するものだが、前期・後期間わず、倭寇を描いたほとんど唯一の絵画資料として知られてきたのである。

2、伝来と現状

『倭寇図巻』が本所に所蔵されるようになった経緯は明確ではない。一九二三年、本所が開催した史料展覧会に「倭寇図」として出品されたのが、学界に知られた初のものである。このときすでに東京帝国大学所蔵となっていた。

一九三〇年、モノクロ写真による『倭寇図巻』の複製が作成され、辻善之助執筆の解説が付せられて刊行されたが、この解説に「東京文求堂

主が将来した」とある。東京文求堂は本郷にあった書店で、漢籍に強いことで知られていた。開業は文久元年（一八六一）、最初は京都にあったが、明治三四年（一九〇一）に東京に移転したという。³⁾ 辻は当時史料編纂所長を務めており、また本所職員としては一九〇一年より名前が見える。⁴⁾ したがって売買記録などは見当たらないものの、一九二三年以前に、文求堂が中国から持ち込んだものを編纂所が購入したものと見てよいであろう。

ところで『倭寇図巻』の題箋には「明仇十洲台湾奏凱図」と記されている。「二六世紀前半期の中国の画家仇英の手になる、台湾征討と勝利を描いた図」という意味になる。だが、一九二三年の史料展示会では「この図巻は明代の人が倭寇の惨害を記念せんがために画かしたるものならん」と述べて、これを「倭寇図」と名付けていた。⁵⁾ 辻も「台湾奏凱とは蓋し後人妄りに題せるものにして、固より其実を得たるものに非ず、（中略）寇民は多く日本刀を帯し、中に一人甲冑を著けたるものあり、その風姿は明かに倭寇を画けるものなるを示す」と述べ、「倭寇図巻」と名付けた。以降、この絵巻は倭寇図巻という名称で定着し、倭寇の実態を生き生きと伝える貴重な資料として珍重されていくこととなる。

現在、『倭寇図巻』は卷子仕立て、筒状の覆に入れられ、白い絹布に包まれて桐箱に納められている。卷子と覆には「明仇十洲台湾奏凱図」とする題箋が付せられている。桐箱は一九八九年に半田九清堂に依頼して修理をしたときに新調されたものである。

本所修復室保存の修理記録によると、『倭寇図巻』は、一九八九年以前に日本で修復された形跡はない。時期は不明ながら中国で修復された形跡はあるという。卷子の表装は明末の絹であり、覆の大部分は明の絹で作られ、前後の芯の絹のみ清初のものであるという。覆が当初からの付属品であれば、『倭寇図巻』の作成年は自動的に清代まで引き下げら

れるが、その当否は不明である。

この一九八九年の修理は、1、にかわによって絵の具の剥落止めを施し、2、裏打紙はすべて除去し、旧補絹は可能な限り除去、3、美濃紙で肌裏打、4、天地および欠失部分に補絹、美栖紙で増裏打、折切には折伏を施す、5、跋の料紙を新調、6、表装裂地は天地に補絹をし、丈が伸びるため、時代裂綸子を新調、7、本紙・裂地・跋紙の天地に覆輪する、8、中国紙で総裏打、9、表紙の錦と見返の綸子を新調という手順で行われ、『倭寇図巻』の保存が講じられた。

3、画面構成

『倭寇図巻』にかかわる基礎的な事実が明らかになったところで、図巻全体の画面構成を見ていこう。

一九七四年、約四〇年ぶりに『倭寇図巻』の複製が作成された。⁶⁾ これは一九三〇年代のものとは異なり、カラーであり、解説は、中世対外関係史研究者田中健夫によるものと美術史研究者川上溼によるものの二つが付せられていた。このなかで田中は、『倭寇図巻』全体を八つの画面からなると解釈したうえで、画面一つ一つについて詳細な検討を行っている。以下、田中の解説によりながら、画面の推移に従って簡単に通覧していこう。

(1) 倭寇船の登場

画面右端から小・中・大と、三隻の倭寇船が描かれ、遠くからだんだん近づいてきているさまが表現される。

(2) 倭寇の上陸

倭寇船が二隻着岸している。船の中には女性が二人描かれている。おそらく掠奪されてきた女性であろう。

(3) 形勢観望

岩の上で、一人の倭寇の肩にもう一人の倭寇が立ち、長槍を支えに形勢を眺めている。岩の下には刀を手にした倭寇たちがたむろし、弓で白鳥を狙っている者もいる。注目されるのは、鉄砲らしき物を持っている倭寇がいることで、これが、本図が後期倭寇を描いたものであるという説の根拠となっている。

(4) 掠奪・放火

倭寇たちが袋や宝箱をかつぎ、船に戻っていつている。その先には長い松明のようなもので火をつけられ、燃え上がる屋敷が描かれる。屋敷の中からは倭寇が袋を担いで出てきており、掠奪のち放火したものである。倭寇たちは全員さんばら髪のはだしである。

(5) 避難する人々

子供を負い、あるいは手を引いて避難する人々の姿が描かれている。

(6) 海上合戦

倭寇船二隻・明船二隻が合戦中である。倭寇側は口に矢を受けて倒れる者、足に矢を受けて水中に落ちる者、すでに溺れようとしている者などがおり、明軍に圧倒されつつある。画面後方には逃れて一息つく避難民の一団が詳細に描かれている。

(7) 勝報

「報捷」と旗をなびかせて騎馬武者が一人、太鼓橋をかけあがろうとしている。橋の反対側にはすでに明の援軍の先頭がさしかかっている。

(8) 出撃する明軍

図巻末尾、「海防新堡」と書かれた城門から続々と明軍が繰り出してきている。刀に盾を持つ兵・騎馬武者・長槍隊・偃月刀を持つ兵・幟を持つ騎馬武者・鎌槍を持つ兵・八卦の三角旗を持つ兵・騎馬武者・八卦を描いた旗を持つ兵という構成の堂々とした進軍である。城門上にはたくさんの旗がはためき、二人の人物が明軍の出撃を見守っている。

画面は右から倭寇、左から明軍が進んでくる構成をとり、海上合戦のシーンで両者がぶつかりあう。威風堂々とした明軍に倭寇は圧倒され、敗れ去る。『倭寇図巻』は明軍の勝利の物語として描かれているのである。

ところで川上は、この『倭寇図巻』について「倭寇活躍の姿を写して生彩を放っている点、職業画家の作品と解するべきである」としたうえで、一方で「明官兵の出撃の段の平板な描写や山や岩に施された皴、これも呉派文人山水画に由来すると思われるが、その筆線の単調なことなどから考えるとオリジナルな画蹟とは見なされない」、原本の作成時期は後期倭寇の盛期かこれに近接する時期に想定されるが、図巻自体の作成時期は「呉派文人画風が民間画工にまで浸透してゆく時期、いわゆる蘇州画派がひろく江浙の間に形成される明末清初（一七世紀）」と推定すべき」とした。川上の言うように、『倭寇図巻』にオリジナルがあり、民間画工の手になるものだとすれば、『倭寇図巻』の類似品は、数多く作られていた可能性も想定される。しかし、一九七〇年代にはそのようなものは知られていなかった。

4、『抗倭図巻』の「発見」

二〇〇七年、浙江工商大学日本文化研究所長王勇氏は、本所画像史料解析センター開設十周年記念シンポジウムにおいて、『抗倭図巻』という、『倭寇図巻』と同じような絵巻が中国国家博物館に所蔵されていることを紹介された。そして、『抗倭図巻』が「浙直文武官僚」「蘇松水陸官兵」「田州報効狼兵長」など所属を表す旗を掲げていることから、明軍と倭寇との戦いを描いたものであることがはっきりしているものであるのに対し、『倭寇図巻』は所属を示す字のある旗がなく、官兵が陰陽八卦の文様の付いた旗を掲げていることから考えれば、むしろ朝鮮軍と倭寇との戦いを描いたものではないかと指摘された。その後、『中国国

家博物館蔵文物研究叢書・絵画卷―歴史画』（上海古籍出版社、二〇〇六年）に図版が掲載されていることがわかり、『抗倭図巻』の全貌を知ることができた。

『抗倭図巻』は以下のような画面構成をとっている。「倭寇船の登場↓倭寇の上陸↓形勢観望↓掠奪・放火↓避難する人々↓海上合戦↓勝報↓捕虜として引き立てられる倭寇たち↓出撃する明軍」。すなわち、捕虜として引き立てられる倭寇たちという形で画面が一つ多いほかは、ほぼ『倭寇図巻』と同様の構成を持っているのである。到来した倭寇船の数が『抗倭図巻』のほうが多い、倭寇の掠奪から逃れて避難する人々のシーンが『抗倭図巻』のほうが長い、『倭寇図巻』の倭寇は裸足だが服は着ているのに対し、『抗倭図巻』の倭寇は半裸のものも多いなど、個別に見ていけば違いも多い。しかし、肩の上ののって形勢を観望している倭寇などはまったく同じ趣向の図柄である（図1）。画面構成の類似からも『抗倭図巻』・『倭寇図巻』には深い関係があることが想定された。川上が想定したように、『倭寇図巻』が江南の画工の手になるものであり、しかもオリジナルなものではなく、原本の存在を想定しうるものだとすれば、両者は同一工房において同じ原本を見て作られたか、もしくは『抗倭図巻』こそが『倭寇図巻』の原本の可能性があるのではないか。あるいは、このような画面構成を持つ、倭寇に対する明軍の勝

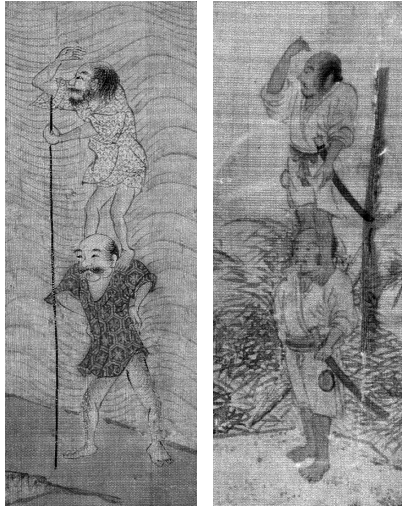


図1 左『倭寇図巻』、右『抗倭図巻』

利の物語は、はやりの図柄の図巻として明末清初の江南社会において、ある程度の数が生産・消費されていた可能性はないだろうか。『抗倭図巻』の発見は、『倭寇図巻』の性格を再考させる契機となった。

5、赤外線撮影の成果から

ところで先述の『倭寇図巻』が朝鮮軍と倭寇との戦いを描いているものだとする王勇氏の議論に対しては、陰陽八卦の旗を掲げていると、なぜ朝鮮軍と判断できるのか、また朝鮮軍と倭寇が戦って朝鮮軍が勝利した物語がなぜ中国で作られる必要があるのかという疑問が即座に思い浮かぶ。この点について、王勇氏は何も触れられていない。

ただ従来、『倭寇図巻』内にあることが知られていた文字は、田中が指摘した「護国救民」「第二哨」「報捷」「海防新堡」などに限られていた。これらは、時期や場所・人物を特定する手がかりとなるものではない。『倭寇図巻』が後期倭寇と明軍の合戦を描いたものであるとされてきたのは、倭寇の一人が一六世紀にならないと東アジアには登場しない鉄砲を持つていたからである（図2）。後期倭寇であれば当然舞台は中国沿海部であり、相手となるのは明軍という連想が働く。『倭寇図巻』が中国から伝来したという由来も、この通説を補強した。しかし朝鮮軍と倭寇との戦いであるとすると王勇説を否定する明確な根拠もまたなかったのである。

こうした状況の打開は、新しい技術によってもたらされた。高精度の赤外線撮影によるあらたな字の発見である。

王勇氏の『抗倭図巻』の紹介によって、『倭寇図巻』と非常によく似た『抗倭図巻』には多くの字が書かれていることが分かった。その後、参照し得た『中国国家博物館蔵文物研究叢書・絵画卷―歴史画』所載



図2

の図版および解説では、「設伏猛烈天兵」「威武神捷天兵」など他にも多くの字が旗に書かれていることが紹介されていた。とりわけ目を引いたのは、「日本弘治一年」という年号が入っていることが指摘されていたことである。もっとも「元年」ではなく、「一年」という言い方は前近代の東アジアにあつてはやや違和感のある表現であり、「治」と「一」の間が空いていることから、二・三・四・五・七の可能性が考えられた（日本年号の弘治は実際には四年まで）。

この成果を念頭に置いて『倭寇図巻』を再度熟覧したところ、いくつか字があつたのではないかと想定される箇所が見出された。赤外線撮影をしたら読めるかもしれないという九州国立博物館研究員畑靖紀氏の助言に従い、二〇一〇年五月、本所写真室に依頼し、撮影をおこなったところ、『倭寇図巻』の性格を決定づける文字が浮かび上がってきた。

発見の第一は、海上合戦のシーンである。明軍とみなされてきた兵士が掲げる旗に「大明神捷海防天兵」とあるのが見出された（図3）。大明は言うまでもなく明朝であり、「天兵」も中国の軍隊の意である。「大明国の神がかり的

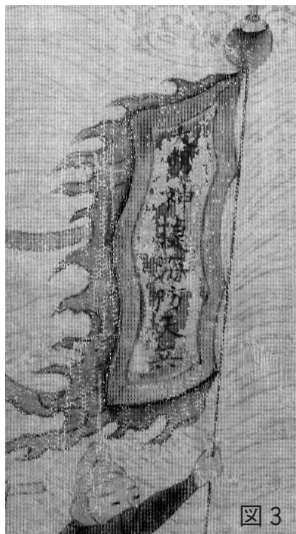


図3

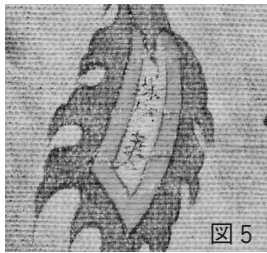


図5

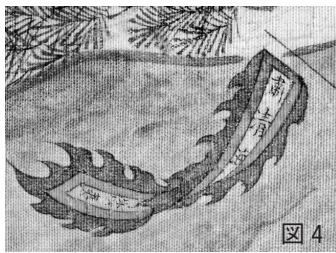


図4

に強い海防を任務とする兵隊」とでも訳されようか。「神捷天兵」という語は『抗倭図巻』にも見られる。

発見の第二は同じシーンで明船の上に翻っている旗に「肅清海」
「倭夷」とあつたことである（図4）。はためているように描かれていたこともあつて、「肅清海」と「倭夷」の間には字がなく、「倭夷」も横倒しとなつているが、九〇度回転させればよりはっきり読むことができる（図5）。ここから明軍が「倭夷」を「肅清」しようとして、出撃してきていることがわかる。

この二つの成果から、『倭寇図巻』は明軍と倭寇との戦いを描いた作品であることが、文字の上から証明されることとなった。

発見の第三は、冒頭、倭寇船の登場のシーンである。遠くから近付きつつある倭寇船にはためく旗に「弘治四年」という文字が浮かび上がった（図6）。弘治四年は日本年号では一五五八年に当たる。明年号で弘治四年は一四九一年だが、倭寇活動の始まるだいぶ以前の時期となつてしまう。『抗倭図巻』に「日本弘治□年」とあることを考慮すれば、この弘治四年も日本の弘治四年と解するのが妥当であると考えられる。

以上の成果から、『倭寇図巻』は一六世紀半ば、明軍と倭寇の戦いを描いたものであることが、『倭寇図巻』自身に書き込まれている文字から確定されることになった。辻が「倭寇図巻」と名付けてちょうど八〇年目の発見であつた。

この一連の発見は撮影技術の賜物である。本所写真室の谷昭佳氏・高山さやか氏によって行われたこの撮影内容の概略を示しておく。
赤外線撮影とは、簡単にいえば、可視光線を遮断し、赤外線に反応したものののみ写し出す撮影方法である。炭素は赤外線に反応しや

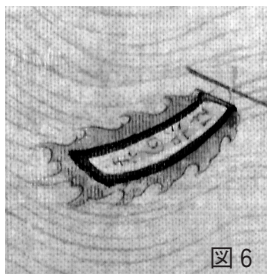


図6

すい性格を持ったため、汚れや擦れなどにより肉眼では確認できない墨色の痕跡を見出すには最適な撮影方法とされる。

海上合戦のシーンで出てきた「大明神捷海防天兵」や「倭夷」の文字は、擦れて肉眼では確認できなくなっていたが、絹布の繊維の奥に残っていた微量な墨の反応をとらえることができたものである。冒頭の「弘治四年」は、白く塗りつぶされた下に残っていた墨の反応をとらえることができたものである。「大明神捷海防天兵」「弘治四年」の場合には、上からの光だけでは顕著な効果が得られなかったため、下からも光を当てて上下の光のバランスを取り、効果を試しながら撮影を行なった。史料の文字の状態は一樣ではないが、個々に合わせて撮影を行なうことで、これらの文字を写し出すことが出来たのである。

ところで、周辺の箇所がそれほど傷んでいないにもかかわらず、大明・天兵・倭夷など画題にかかわる文字がひどく擦れて読めないこと、弘治四年という年号が白く塗られてしまっていることなどは、ある特定の意図に基づく作為性を感じずにはおれない。まったくの推測になるが、この擦れや白塗りは、ある段階で、「台湾奏凱図」——台湾征討と勝利の記録——として『倭寇図巻』が性格づけられた際の故意的な操作なのではないだろうか。

以上の成果から、『倭寇図巻』が通説通り、一六世紀の明軍と倭寇の合戦を描いたものであることが判明した。同時に、『倭寇図巻』と『抗倭図巻』とは単なる図柄の類似にはとどまらない、もっと深い関係があるのではないかと予測された。『抗倭図巻』の「日本弘治□年」が、もし「弘治四年」であったならば、『抗倭図巻』と『倭寇図巻』とは、一般化された倭寇に対する明軍の勝利の物語ではなく、現実に行なわれた具体的な戦闘と勝利を描いた作品である可能性も出てくるのではないかと思われたからである。中国での原本調査と赤外線撮影の実現が期待された。

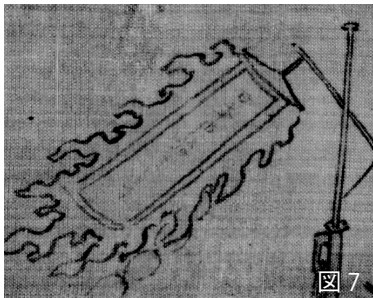
6、嘉靖大倭寇の記憶

中国国家博物館のご理解とご協力により、これが実現したのは二〇一〇年九月のことである。本所の榎原雅治所長・保谷徹副所長・写真室の谷・高山両氏と報告者は、博物館を訪問し、覚書を締結するとともに、原本調査と赤外線撮影を行なった。

調査の結果、『抗倭図巻』において、従来「日本弘治□年」と読まれていた部分は、磨滅ではなく、布自体が剥落していたために、赤外線撮影によっても、これが何年と書いてあったのか、判別することはできなかった。だが、『抗倭図巻』の冒頭、着岸した倭寇船に翻る旗を赤外線撮影したところ、「日本弘治三年」という文字が辛うじて浮かび上がった（図7）。当該箇所は、水濡れによる色落ちが激しく、肉眼では字があるとはとても思えなかったが、赤外線撮影とその画像の調整により、ようやく姿を現したのである。

この発見によって、『抗倭図巻』は弘治三年（一五五七）、『倭寇図巻』は弘治四年（一五五八）という年の出来事として描かれていることが判明した。このことは新たな疑問を提起する。すなわち、『抗倭図巻』と『倭寇図巻』の画面構成の類似性については触れてきたところであるが、この双子か親子か、その議論は今後深める必要があるが、明らかに関係性の深い絵巻二つは、一年違いの年号を持つことになったのである。年が違うとなると、ある特定の戦闘を描いたものとは解釈しにくい。

改めて子細に見ていくと、両図巻はある



特定の戦闘を描いたものと解しうる要素はあまりない。日本中世において作られた、ある特定の戦闘を描いたものとしてただちに思い浮かぶのは、『蒙古襲来絵詞』や『後三年合戦絵巻』などである。これらは、絵巻中のところどころに挟まれた詞書によって、いつ・どこで・誰が活躍したのか詳細に説明されている。『蒙古襲来絵詞』に至っては、詞書のほかに凶中に登場人物の名前や場所が書き込まれ、竹崎季長という御家人が博多湾で行われた対モンゴル戦争で活躍したことが強調されている。竹崎はこの絵詞を作らせた本人である。

これに対して、『倭寇図巻』も『抗倭図巻』も倭寇と戦って明軍が勝利したことを描いているのは明確であるが、詞書に当たるとは異なるものは存在せず、また特定の人物がクローズアップされる、どこの地域で行われた戦闘であるか、その地域性ははっきりわかるものが書き込まれるといった特徴もない。特定の戦闘を描くこと、さらにもしくはその戦闘における特定の人物の活躍を顕彰することを目的として作られたものであるならば、凶中にいつ・どこで・誰が活躍したかという情報が表現されていて然るべきではないかと考える。しかし、『倭寇図巻』より比較的文字情報の多い『抗倭図巻』においても、出動している軍隊の所属は書いてあるものの、全体の指揮官の名前などを知ることはできない。所属といっても、『浙直』＝浙江・直隸、蘇松＝蘇州・松江は、いずれも倭寇が頻繁に襲撃したところである。倭寇との戦いにおいて、それら地方官衙の軍隊が登場するのは当然で、それだけでは、特定の戦闘を描いたものと解するには情報が足りない。年号は示されているのだから、当該年、明軍が倭寇と戦って勝利した記録を探して比定していくことも可能かもしれないが、二つの図巻の年がずれるとなるとそれも考えにくい。両者が違う画面構成を持っていれば、別々の戦闘を想定することも可能だが、別々の戦闘を描いた作品がこれほどまでに類似した構成を

とるのはむしろ不自然であろう。

それでは、いったい『倭寇図巻』・『抗倭図巻』は何を描いているのか。弘治四年・弘治三年は何を表現しようとしている年号なのか。この謎については、報告者はどちらも嘉靖大倭寇期の年号であるという以上の成案をいまだ持たない。

嘉靖大倭寇とは、嘉靖三〇年代（一五五〇年代）、中国沿海部、とりわけ江南地方を襲った激しい海賊活動である。嘉靖二七年（一五四八）、浙江巡撫兼福建都御史（浙江行政司令官兼福建軍事司令官）であった朱紈は、倭寇の巢窟とみなされていた双嶼を攻撃・陥落させた。これは結果として、密貿易集団／海賊集団の拡散化・過激化を招き、以後主として江蘇・浙江の沿海部は激しい掠奪にさらされることとなった。このなかで一大勢力としてのし上がったのが王直で、彼は烈港に拠点を置いていた。嘉靖三二年（一五五三）明軍は烈港を攻撃、敗れた王直は日本平戸に逃亡した。このうち海賊の襲撃はさらに激しさを増すことになった。嘉靖大倭寇は、一五四八年の双嶼陥落ないし、この烈港陥落を以て始期と見なされる⁷⁾。

事態を憂慮した明朝は、嘉靖三四年（一五五五）、王直の招撫と日本国王への倭寇禁庄要求を目的として、陳可願・蔣洲を日本に遣わした。陳可願らはまず王直と接触、帰国すれば貿易活動を認めると称し、帰国を承諾させた。陳可願は、王直の配下とともに一足先に帰国し、蔣洲は王直と同道して、豊後大友氏のところに向かい、倭寇禁庄を説くとともに、対馬宗氏・周防大内氏のもとに使者を派遣し倭寇禁庄すべき旨を伝えた⁸⁾。嘉靖三六年（一五五七）四月蔣洲・王直と大友氏使者徳陽・善妙は、船団を仕立てて松浦を出発、蔣洲・徳陽の乗った船は七月に、嵐にあつて遅れた王直・善妙の船は一〇月に、舟山の別々の港に到着した。しかし明朝は、徳陽らが勘合を持参せず、また日本国王名義の書状を持

参していなかったことから、これを正式の使者として認めず、蔣洲を獄に下し、一月には王直を誘引してこれを捕らえ、翌年正月、杭州按察司に囚獄した⁽⁹⁾。ここに至って徳陽・善妙らは合流して明軍とたたかい、敗れて船を焼かれたものの、新たに造船し、嘉靖三十七年一月逃亡した⁽¹⁰⁾。王直は嘉靖三十八年二月(一五五九)斬首された⁽¹¹⁾。

後期倭寇とよばれる現象は、一五六七年、明朝が海禁政策を緩めることで、やや落ち着き、一六世紀末、日本に統一政権が生まれることによつて終息に向かう⁽¹²⁾。一五五九年の王直の死によつて後期倭寇の活動が止んだわけではないが、嘉靖大倭寇は、王直の死を以て終焉とみなされることが多い。これは、王直の捕縛処刑が当時の浙江総督胡宗憲の功績として宣伝されていたという事情にもよる⁽¹³⁾。

この嘉靖大倭寇と呼ばれる現象が本質的にはどう評価されるべきものであったのかは、ここではひとまずおく。重要なのは、後期倭寇とよばれる動乱期のなかでもとりわけ、王直の平戸逃亡から捕縛斬首という流れが、嘉靖大倭寇の開始とその終焉として記憶され語られてきたという事実である。

先にふれたように、嘉靖三六年すなわち弘治三年は王直が日本から戻り捕縛された年である。嘉靖三十七年すなわち弘治四年には按察司の獄に下され、翌年斬首された。同行してきた大友氏使者徳陽・善妙らは弘治四年中に明軍と戦って逃亡した。弘治三年・四年はいわば嘉靖大倭寇鎮圧の象徴的な年なのである。このような年にかけて倭寇に対する明軍の勝利の物語を描くことは、倭寇の実態がどのようなものであれ、被害を受けた地域にとつての社会的要請としてはあり得るのではないか。

また陳可願らの日本での見聞は、鄭若曾の日本研究書(倭寇対策書でもある)『日本図纂』(一五六一年刊行)・『籌海図編』(一五六二年刊行)の記述に生かされた。『籌海図編』はその後ながく中国における日本研

究の亀鑑としての地位を占めた書物である⁽¹⁴⁾。なお作者の鄭若曾は胡宗憲の幕下にあり、『籌海図編』は倭寇鎮圧に関わる胡宗憲の功績を強調する性格も持っている。

こうしたのちの時代における影響も考慮すれば、『抗倭図巻』・『倭寇図巻』は、特定の戦闘を描いたものというよりは、嘉靖大倭寇に対する明軍の勝利の物語として象徴的に描かれ、それにふさわしい年として、弘治三年・四年という年が選択されているのではないだろうか。

だがそれにしてもなぜ、これほどまでに似ている二つの作品の年はずれるのだろうか。またなぜ、中国で描かれた中国で享受されるはずの作品であるにも拘らず、絵の中には日本年号が書かれるのだろうか。図巻を享受するのはある程度の富裕層、知識人層であるとは想定されるものの、弘治四年を明の嘉靖三十七年であると、あるいは弘治三年を明の嘉靖三六年であると、即座に判別がつくものなのであろうか。『抗倭図巻』の発見と赤外線撮影の成果によつて、飛躍的に深められた倭寇図巻研究であるが、さらなる謎を抱えることとなった。今後、美術史・明清史・日本史の相互協力による研究が望まれるゆえんである。

〔註〕

- (1) 二〇一〇年一〇月に文京区教科書センターに寄贈されていた中学社会科歴史分野、高校日本史Bの教科書を検索したところ、中学では自由社、高校では明成社を除く各社の教科書に『倭寇図巻』が図版として載せられていた。うち、帝国書院の社会科学を除いては、すべて倭寇と明軍の戦う海上合戦のシーンが採用されていた(帝国書院は倭寇が上陸するシーンと掠奪しているシーンの二つを採用)。日本で教育を受けたことがあれば一度は見たことのある図であるといっても過言ではないだろう。なお確認した教科書は以下の通り。中学・大阪書籍『中学社会歴史分野』・教育出版『中学社会歴史』・帝国書院『社会科学中学生の歴史』・日本文教出版『中学生の社会科学歴史』・日本書籍『中学社会歴史的分野』・清水書院『新中学校歴史』・東京書籍『新しい社会歴史』・自由社『中学社会新編新しい歴史教科書』。高校・明成社『最新日本史』・実教出版『日本史B』・東京書籍『新選日本史B』・日本史B』・山川出版社『詳説日本史B』・桐原書店『新日本史B』。
- (2) 『倭寇図巻』古兵書図録刊行会、一九三〇年。
- (3) 中山久四郎「文求堂を頌へる」(『日中友好的先駆者「文求堂」主人田中慶太郎』極東物産、一九八七年、初出一九五四年)。
- (4) 『東京大学史料編纂所史 史料集』東京大学史料編纂所、二〇〇一年。
- (5) 『大正十二年五月四、五、六、七日開催第十一回史料展覧会列品目録』東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二三年。
- (6) 『倭寇図巻』近藤出版社、一九七四年。
- (7) 橋本雄・米谷均「倭寇論のゆくえ」『海域アジア史研究入門』(岩波書店、二〇〇八年)。なお同時代的には、明軍の烈港襲撃の理由となった一五五二年の台州府黄巖県襲撃が端緒となったと言われた(山崎岳「船主王直功罪考(前編)」『東方学報』八五、二〇一〇年)。
- (8) 『明実録』嘉靖三五年四月甲午条。「嘉靖三五年一月三日蔣洲咨文」(東京大学史料編纂所蔵)。
- (9) 『明実録』嘉靖三六年八月甲辰条・同一一月乙卯条。『倭変事略』「附録」『南雷文約』卷三「蔣洲伝」(田中健夫後掲書所引)。李献章「嘉靖年間に

- おける浙海の私商および船主王直行蹟考」(『史学』三四―一・二、一九六一年)。田中健夫「明人蔣洲の日本宣論」(同著『中世対外関係史』東大出版会、一九七五年)・米谷均「後期倭寇から朝鮮侵略へ」(池享編『天下統一と朝鮮侵略』吉川弘文館、二〇〇三年)。
- (10) 『明実録』嘉靖三八年七月丙辰・同一〇月辛亥・同一一月丙戌・同三年四月乙卯条。『明史』卷二〇五「胡宗憲伝」。
- (11) 『明実録』嘉靖三八年一月丙申条。『籌海図編』卷五「浙江倭変紀」・卷九「擒獲王直」。
- (12) 橋本雄・米谷均「倭寇論のゆくえ」(前掲)。
- (13) 『明史』卷二〇五「胡宗憲伝」。『籌海図編』卷五「浙江倭変紀」・卷九「擒獲王直」など。
- (14) 田中健夫『倭寇』教育社新書、一九八二年。